

意志表現¹をめぐる日中対照研究 ——情意的・認知的性質からの考察を中心に——

神戸市外国語大学大学院 孫樹喬

1 問題提起

発表者は、日本語と中国語の意志表現について対照研究を行う中、日本語の「シタイ」「シヨウ」と中国語の「要」「想」は、意志表現としての使い方に、次のような明らかな相違が見られることがわかった。

まず、人称主体の制限に見られる相違である。周知の通り、日本語の「シタイ」「シヨウ」は、現在時制でそのままの形では、一人称主体の願望や意志しか表すことができない。

- (1) a. ラーメンを食べたい。²
b. *彼はラーメンを食べたい。
- (2) a. ラーメンを食べよう。
b. *彼はラーメンを食べよう。

例 1.a と例 2.a は主体としての「私」が現れなくても、話し手の意志を表すことは明白である。一方、中国語の「要」と「想」は、一人称主体の意志を表す場合は、一人称主体の「我」が明示することが必要とされる。更に、「我」を三人称の「他（她）」に置き換えても、文としては成立する。

- (3) a. 我 想 吃 拉面。
私 想 食べる ラーメン → ラーメンを食べたい。
b. 他 想 吃 拉面
彼 想 食べる ラーメン → 彼はラーメンを食べたがっている。
- (4) a. 我 要 吃 拉面。
私 要 食べる ラーメン → ラーメンを食べたい/食べる。
b. 他 要 吃 拉面
彼 要 食べる ラーメン → 彼はラーメンを食べたがっている/食べる。

もう一つは、表現の仕方に見られる相違である。「シタイ」と「シヨウ」は、実際の使用においては、もちろんそのままの形で用いられる場合もあるが、単純に聞き手に話し手の意志を表す場合、むしろ文末に何らかの表現を付け加える形式が多く見られる。例えば、相手に仕事をやめようとするのを伝える時は、次のような表現が考えられる。

- (5) 仕事をやめたい。
- (6) 仕事をやめたいのだ。
- (7) 仕事をやめたいと思う。
- (8) 仕事をやめようと思う。
- (9) 仕事をやめようと思っている。

¹ ここで言及している「意志表現」について、二点を説明しておきたい。一つ目は、ここでの「意志」が広い意味の意志を指すことである。日本語には、「意志」と「願望」を区別する傾向が見られるが、外国語には、「意志」と「願望」に一線を画くことができない表現がたくさん存在する。今回は、日本語と中国語との対照を念頭に置いているので、意志・願望類の表現を一概に「意志表現」と呼ぶことにする。二つ目は、本発表で扱う意志表現の範囲についての説明である。意志を表す表現形式はたくさん考えられるが、今回は述語に現れる形式を中心に、その例外の形式を除外することにする。また、日中両言語の相違をはっきり出すために、述語形式も有標形式、つまり助動詞的なものに限定し選択したのである。

² 出典のない例文は作者の作例である。

例5のような表現は、使用場面がかなり制限され、実際のコミュニケーションでは、むしろ例6~9のような表現のほうが多く使われている。一方、中国語で「想」や「要」を使って仕事をやめる意志を伝える時、日本語のように多様な形は見当たらない。

- (10) 我 想 辞职。
私 想 仕事を辞める。
- (11) 我 要 辞职。
私 要 仕事を辞める。

何故同じ意志を表す表現として、「シタイ」・「シヨウ」と「要」・「想」とは使用において、上述のような相違が存在するのか。本発表では、上述の現象について、意志表現に見られる情意的・認識的性質から解釈していきたい。

本発表はまず、議論の準備として、意志表現の「シタイ」・「シヨウ」・「要」・「想」の基本的な意味と情意的・認識的という対の概念について説明する。次に、日本語の意志表現に見られる典型的に情意的なものや典型的に認識的なものを考察する。意志表現の典型的に情意的なものや典型的に認識的なものとの相違を明らかにしたうえで、中国語の「要」「想」と情意的・認識的性質との関係について検討する。最後に、情意的・認識的性質における「シタイ」・「シヨウ」と「要」・「想」との違いは、それぞれ使用上への影響を明らかにする。

なお、本研究は、両言語間の表現に見られる相違とその原因を重点的に論じたいので、両言語の表現の意味の対応³や、言語内の表現の相違⁴について、必要な時だけ言及するが、主には省くことにする。

2 「シタイ」・「シヨウ」・「要」・「想」の基本的な意味

本発表の研究対象となる表現の意味用法について簡単に紹介しておく。

「シタイ」は一般に、「願望」や「意欲」を表す典型的な願望表現であるとされている。「お水を飲みたい」と発話すると、必ず現在時制の一人称主体の願望を表すことを意味している。更に、事態実現の望ましさから、「タイ」には「価値判断」を表すこともできる(益岡 2006) ⁵。

一方、「シヨウ」はそもそも動詞の意志形であり、話し手の意志を表す典型的な表現である。「シヨウ」による意志は「決意」であり、発話瞬間の決意や決心を捉えている(宮崎 2006)⁶。「意志」以外に、「シヨウ」は「推量」を表す用法もある。益岡(2007)によると、「シヨウ」による「意志」以外の用法は更に「推量」と「断定緩和」があるとされている。しかし、推量や断定緩和を表す「シヨウ」は、現代語では、意志の「シヨウ」ほど広く使用されておらず、慣用的表現や文語的文体の書き言葉において残ったものが多い⁷。

「要」は動詞として、何かを必要とするや、何かを求めるまたは要求するという意味で使われている。モーダル動詞として、「意志・願望」以外に、「当為」「蓋然性」「推測・判断」を表すことができる。意志表現としての「要」は、意味の幅が大きく、基本的に話し

³ 「シタイ」や「シヨウ」と「要」「想」は意味上ではどれぐらい対応しているかのことを指す。

⁴ 意志表現としての「シタイ」と「シヨウ」との相違、「要」と「想」との相違を指す。

⁵ 「シタイ」に見られる願望と価値判断という2つの意味の関係について、益岡(2006)では、「シタイ」の基本的な意味は願望であり、そこから価値判断の意味が派生するという見方に立っている。

⁶ 「シヨウ」による意志は定まっているか否かについて、宮崎(2006)は森山(1990)や益岡(2002)と違った意見を持っている。森山(1990)は判断形成過程における位置からすれば、意志形が「決定しつつある判断」と述べている。益岡(2002)では、「シヨウ」は非定の意志を表す定保留表現とされている。

⁷ 土岐(2010)を参考

手の願望・意志の両方を表すことができる。

「想」はそもそも思考動詞であり、「思考する・考える・思う」という意味が本来の意味である。そのほか、モーダル動詞としての意味も持ち、「願望・心積もり」や「推測⁸」を表す用法もある。

以上、本発表に深く関わる四つの表現について、簡単に触れておいた。各表現の意味用法を見る限り、どの表現ももっぱら意志を表す専用形式ではない。今回の発表は、各表現の全体像を意識したうえ、日中両言語の特徴をよりはっきり出すために、「意志」や「願望」を表す用法に注目したい。従って、これからの論述は、殆ど意志という意味範疇における議論を中心とするものである。

3 情意的と認知的

本格的な論議に入る前に、ここでは、「情意的」と「認知的」の意味について説明しておく。まず、用語について、仁田(1991)に由来することを断っておきたい。仁田(1991)は、情意的な命題めあてのモダリティとして、情意系の〈待ち望み⁹〉を取り上げ、認知的な命題めあてのモダリティとして認識系の〈判断¹⁰〉を取り上げているのである。〈意志〉や〈希望〉や〈願望〉は〈待ち望み〉の下位タイプであるとされている。

本発表で言及する「情意的性質」と「認知的性質」は、基本的に仁田(1991)と同じものである。ただし、仁田(1991)は、モダリティのカテゴリにおいて「情意系」と「認識系」を検討し、「情意系」を「待ち望み」を有する表現に限定し、「認識系」を「判断」に限定しているが、本研究ではどのような限定は与えない。

われわれは、日常生活で何かについて発話するとき、少なくとも、二種類の発話タイプが考えられる。一つは、話し手の即座のリアルな感情によるもの、もう一つは、話し手の知性の判断によるものである。前者は、話し手の感情や気持ちを表し、より主観性が高い表現であるが、後者は、話し手の理性判断や知識を表し、より客観性の高い表現と言えるだろう。

(12) うれしい!

(13) 今日 は 月曜日だ。

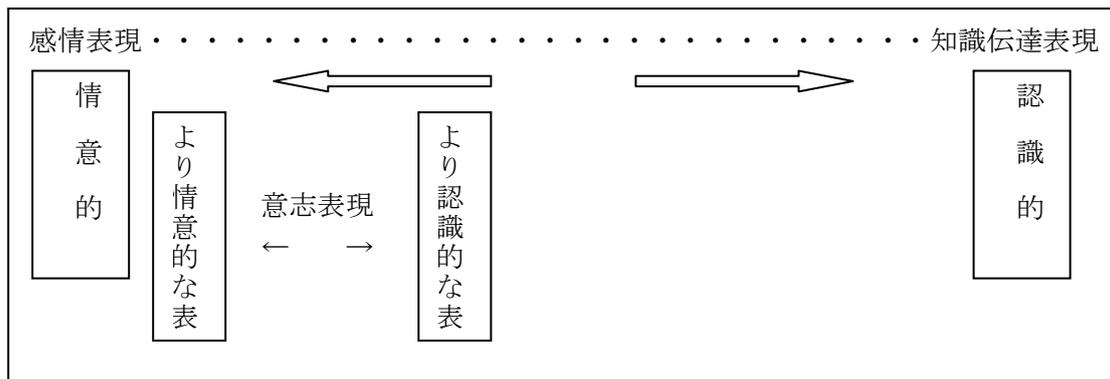
本発表で考えている情意的性質と認知的性質は、話し手のリアルタイムの感情表現に近いかわかると話し手の知識伝達に近いかわかるという性質である。もちろん、そもそも、感情と知識は、人間の脳の中でくっきり区別できるものではなく、一つの表現にどちらの要素も入る状況も考えられる。従って、本発表で言及する情意的性質と認知的性質は絶対的なものではなく、むしろあるカテゴリや意味範疇の中で、より感情表出に近いものを情意的な表現とし、より知識伝達に近いものを認知的な表現とするのである。情意的性質と認知的性質を一つの連続体と考えれば、感情表現と知識伝達表現は、まさにその両極に据わる。今回の研究対象とする意志表現は、表現そのものは情意的な表現であるが、そのうちより情意的性質が顕著なものより認知的性質が顕著なものがあると考えられる。

図1 意志表現と情意的・認知的性質

⁸ 「推測」を表すためには、「我想」のような「一人称主体+想」の形が必要とされる。

⁹ 仁田(1991)によると、「待ち望みとは、言表事態の成立を望ましいもの・実現させたいものとして捉える、といった言表事態に対する話し手の把握のあり方である」(仁田 1991 : 59)。

¹⁰ 認識系の判断は、「言表事態に対する話し手の認知的な態度のあり方を表すもの」(仁田 1991 : 59) と説明されている。



意志表現により情意的なものより認知的なものがあるという考え方は、哲学上における「意志」についての論争にも証明されている。「意志」は一般的に意識的にある行動や行為を実現させようとする心的能力あるいは精神的な働きとされ、知識、感情に対立するものと考えられ、合わせて「知情意」と呼ばれる。従来、「意志」と「知識」や「感情」との関係については、『世界大百科事典 第2版』は、次のように記述されている。

この意志が知性や感情といった他の心的機能といかなる関係にあるかという点については、哲学者や心理学者のあいだでも意見が分かれ、それぞれを自立した機能と見る知情意三分法(J.N.テーテンス)や、意志は表象や判断のような知的機能から生ずると考える主知的立場(プラトン, デカルト), 意志を感情の一種と見るか、あるいは少なくとも感情によって動機づけられると見る主情的立場(ブント), 逆に感情を意志過程の反映と見る立場(W.ジェームズ), 意志を自我にかかわる欲求と考える立場(F.E.ベネケ)などさまざまである。(2-237)

従来哲学者や心理学者の「意志」と「感情」や「知的機能」との関係についての意見の分岐は、まさに、「意志」の複雑性を語っている。というのは、「心的能力」や「精神的働き」としての「意志」は「感情」によるものと解釈しやすいものもあれば、「知的機能」、つまり「認識」によるものと解釈しやすいものもあるからである。例えば、単純に「行く」という動作を行おうとする心理状態は、「どうしても行きたい」という抑えられない感情そのままの表示の場合も考えられれば、感情と別に「行くことになっている」という認識の表示の場合も考えられる。このような二つの側面の存在は、本発表で行う意志表現に対して情意的性質・認知的性質から考察する原点となっている。

この「情意的性質」と「認知的性質」との対立は、意志を表す表現形式に見られる具体的な意志のモーダルな意味のタイプや談話における機能が関わる意味に大いに関係している。次の部分では、意志表現の具体的な形式を取り上げながら、より情意的な意志表現とより認知的な意志表現との相違について詳しく検討していく。

4 典型的に情意的な意志表現と典型的に認知的な意志表現

意志表現と情意的・認知的性質との関係を明らかにするために、この部分では、日本語の意志表現「シタイ」・「シヨウ」と「スルツモリダ」の間に見られる相違を取り上げることとする。結論から言えば、同じ意志のモダリティのカテゴリーに収められながら、「シタイ」・「シヨウ」はより情意的性質が強い表現で、「スルツモリダ」は話し手の意志を表すより認知的性質の強い表現である。「シタイ」・「シヨウ」と「スルツモリダ」の用法を観察すると、次のいくつかの明らかな相違点が挙げられる。

まず、心内発話や独話に使うことができるか否かについて、「スルツモリダ」は会話文

や談話にしか現れないのに対し、「シタイ」と「シヨウ」は話し手の心内発話や独り言にも用いられる。「行くつもりだ」と発話されると、必ず聞き手の存在が必要とされるが、「行きたい」または「行こう」という発話は聞き手がいてもいなくても成り立つ。この点については、仁田(1991)をはじめ、数多くの研究によって証明されている。

次に、即座の意志を表せるかどうかについて、「シタイ」と「シヨウ」は、即座の意志を表すことができるのに対し、「スルツモリダ」はできない。「スルツモリダ」による話し手の意志は、発話時点ですでに決まったものである。

(14) あっ、いけない。大事な約束だから、忘れないようにちゃんと書いておこう。
『博士の愛した数式』

(15) 「(前略) タイガースの試合、観たくないの？」
見栄を張っているのか、しばらくうつむいたまま、もぞもぞしていたが、やがて嬉しさをこらえきれなくなり、私の回りを飛び跳ねだした。
「観たい。誰が何と言おうと観たい。行くよ。絶対に行く」
『博士の愛した数式』

(16) そういえば、明日パーティがあるんだけど、行く？
*行くつもりだ。

更に、「スルツモリダ」による意志は、働きかけ性を持っておらず、「シタイ」や「シヨウ」のように聞き手を巻き込むことは絶対無い。

(17) 赤いスズキアルトに乗った小さな女の子が、助手席の窓から顔を突き出し、ぼかんと口を開けて青豆を眺めていた。それから振り向いて母親に「ねえねえ、あの女の子、何しているの?どこに行くの?」と尋ねた。「私も外に出て歩きたい。ねえ、お母さん、私も外に出たい。ねえ、お母さん」と大きな声で執拗に要求した。母親はただ黙って首を振った。
『1Q84 BOOK I』

(18) 「さあ、もう寝ましょう。明日も早いんだから」私は言った。
「うん、」ルートはラジオのスイッチを切った。『博士の愛した数式』

「シタイ」と「シヨウ」は場面によって、聞き手を対象動作に巻き込む¹¹ことがあり、例 17 は間接的な依頼、例 18 は直接的な勧誘となっている。しかし、「スルツモリダ」が用いられる発話は、聞き手に働きかけることはできない。

(19) 今から食事をするつもりです。

例 19 のような発話は、話し手自身の動作にしか関わりがなく、聞き手の行動に直接に何らかの影響を与えることは考えにくい。このような働きかけ性を備えるか否かという特性は、仁田(1991)で言及している「待ち望み性」に関連している。「シタイ」と「シヨウ」は対象動作の実現に対して望ましく思う表現であるが、一方、「スルツモリダ」は、既に意志決定のプロセスから離れ、決定済みの意志を伝達する表現なので、対象動作の実現に対して望んでいる気持ちが見られない。

最後に、人称制限にも「シタイ」・「シヨウ」と「スルツモリダ」の間に明らかな相違が見られる。「シタイ」・「シヨウ」は、発話時そのままの形では発話者の意志しか表せないのに対し、「スルツモリダ」は、一人称以外に、第三者も主体になることが可能であり、

¹¹ 「シタイ」と「シヨウ」はともに聞き手へなんらかの働きかけを与えることができるが、巻き込み方はまったく違うのである。「シタイ」はあくまでも間接的なもので、「シヨウ」は直接に聞き手に作用するものである。本発表は、両者の共通点を注目することにする。

人称の制限がない。

(20)私は明日学校へ行くつもりだ。

(21)彼は明日学校へ行くつもりだ。

そもそも、感情表現というのは、話し手に限定する、聞き手の存在に頼らない、即座的である、聞き手を巻き込むことができるなどの特徴が考えられる。「シタイ」と「シヨウ」を感情表現と照らし合わせると、かなり性質が近いことがわかり、より情意的意志表現と位置づけたわけである。情意的意志表現の「シタイ」・「シヨウ」は、本来感情表現のように聞き手めあての表現ではないが、聞き手が存在する場合は、対象動作と聞き手との関係によって、聞き手に「意志の訴え」や「行動への働きかけ」という機能を持つのである。

(22)アイスを食べたい。

(23)よし、掃除しよう。

「シタイ」や「シヨウ」の対象動作の実現または実行は、聞き手が関与しない場合は、単なる話し手の「意志の表出」になるが、聞き手が関与している場合は、聞き手への働きかけになる¹²。

一方、「スルツモリダ」は聞き手存在会話にしか現れない、決まった意志を表す、聞き手を対象動作に巻き込むことはない、意志の主体は話し手以外でもよいという点から、感情表現に相反する知識または情報伝達の表現に近いことがわかった。「スルツモリダ」は従来周辺的な意志表現とされ、「意志」より「意図」を表す表現である。上述の特徴から明らかになったように、「スルツモリダ」で表す意志は、「シヨウ」のような即座の決意でもなく、「スル」のような予定でもないのである。「スルツモリダ」で表した意志は、決まったものではなく、変更や取消しが許容されるものである。

(24)私は明日、3時に研究室に行くつもりだったが、急に用事ができて行けるかどうかわからない。

更に、「シタイ」や「シヨウ」と比べて、待ち望み性が弱いという点を考え、「スルツモリダ」はやはり意志の実行に関心を持たず単に話し手の意図を表す認識的意志表現である¹³。そもそも、「スルツモリダ」は「～形式名詞+だ」という判断形式を持ち、形からもほかの意志表現と区別されるのである。では、「スルツモリダ」による意志は、対人対話ではどんな機能を持っているだろう。上で述べたように、「シタイ」・「シヨウ」は、対人対話では、「意志の訴え」や「行動への働きかけ」という機能を持つとしているが、「スルツモリダ」は、「情報の伝達」に重点を置く表現なので、「意図の伝達」という機能を持っていると考えられる。

以上の論述から、日本語の意志表現の有標形式は、情意的なものとして認識的なものを形式上からはっきり区別することがわかった。「シタイ」・「シヨウ」と「スルツモリダ」と比較してみると、「シタイ」・「シヨウ」はより情意的な意志表現であり、「スルツモリダ」はより認識的な意志表現である。更に、両者の対人会話における機能を考察してみると、情意的意志表現の「シタイ」・「シヨウ」は、聞き手に「意志の訴え」や「行動への働きかけ」といった機能を持ち、認識的意志表現の「スルツモリダ」は、聞き手に「話し手の意図を伝達する」という機能を持つ。

¹² 「シタイ」の場合は、「間接的依頼」で、「シヨウ」の場合は、「勧誘」または「和らげた命令」になるのである。

¹³ 安達 (1999) では、「つもりだ」「気だ」を意志表現の周辺的な形式と扱い、「スルツモリダ」は「主体の動作の裏にある意図を表すのが本来的な意味である」と指摘している。

5 中国語の意志表現の「要」・「想」と情意的・認識的性質

「想」と「要」は意志のモーダルな意味を見る限り、基本的には情意的な面がはっきりしている表現である。具体的には、次のような特徴が見られる。

①「想」と「要」は会話にも心内発話にも使うことができる。

特に、願望を表す「想」と願望や決意を表す「要」は聞き手の存在が必ずしも必要とされず、独り言などにも使われる。例えば、一人で歩いている時に、自動販売機のジュースを見かけて、心の中で「ジュースを飲みたいなあ」と思う時、心内発話として「好想喝果汁啊。」「我要喝果汁。」などが挙げられる。そもそも、中国語の意志を表す表現形式は、聞き手めあて専用の形式が存在せず、対話に限られると言った使用制限がないのである。

②「想」と「要」は即座の意志を表せる。

意志を表す表現形式としての「要」は即座の意志を表すことができる。

(25) “我要看，不管谁说什么都要看！我要去，绝对要去！”

日本語原文：「観たい。誰が何と言おうと観たい。行くよ。絶対に行く」

『博士の愛した数式』中国語版

一方、「想」による意志・願望も即座のものを表すことができる。即座のものについて次の例を見てみよう。

(26) “我 明天 要 去 趟 京都。” “我也想去”

私 明日 要 行く 一回 京都 私 も 想 いく

「明日京都に行つて来る」「私も行きたい」

③「想」と「要」は働きかけ性を持つことができる。

「要」による願望や決意と「想」による願望は聞き手に働きかけ、対象動作に巻き込むことがある。

(27) (子供が親に対して) 我 想/要 吃 冰激凌。

私 想/要 食べる アイスクリーム

アイスクリームを食べたい！

(28) 我 身上 有 枪, 我要你跟我来。 『読者(合本)』

私 手元にある銃 私 要 あなた 従う 私 来る

銃を持っているから、ついて来なさい。

例28の「要」は聞き手に対して間接的な依頼、例29の「要」は聞き手に対して直接的な命令を表している。

④「想」と「要」は動作の実行や事態の実現を望む気持ちを伴うことが多い。

そもそも、「シタイ」・「ショウ」を見てわかるように、「願望」や「決意」というモーダルな意味は、行動の実行や実現に対する積極的な気持ちによって成り立つ意味である。従って、「シタイ」や「ショウ」と同じように、願望や決意を表す「要」と願望を表す「想」は、動作の実行や事態の実現を望む気持ちが伴う表現である。この点は、上で挙げた例を見れば十分わかる。

しかし、情意的性質が著しい一方、「想」と「要」には認識的な表現しか持たない特徴も見せる。つまり、「要」「想」が用いられる表現の中は、次のようなものも見られる。

(29) (友人に結婚の予定を伝える時) 我们想明年结婚。

来年結婚するつもりだ。

(30) 秦朗：心蕾，我有话跟你说。其实我明天……要回台湾。

《转角遇到爱》『ホントの恋の見つけかた』

日本語訳¹⁴

秦朗：心蕾、話があるんだ。実はあした……台湾へ帰るんだ。

例 29、30 は、話し手の既定の意志を表す表現である。このような表現は性質が「意図の伝達」を表す「スルツモリダ」に非常に近い。情報伝達を目的とするタイプの表現なので、聞き手に対象動作に巻き込むことは絶対ないし、決定済みの段階の意志なので「待ち望み性」もはっきりしていない。

上の議論からわかるように、中国語の意志を表す「要」・「想」は、情意的か認識的かの性質において、日本語ほどはっきりと分化していない。「要」、「想」は基本的に情意的な意志も認識的な意志も表せる。そもそも、「要」と「想」はモーダル動詞以前に、自立動詞としての用法も可能である。「要」は特に多義的な表現で、「当為」「推測」などの認識的なモダリティの意味も持っている。例 29 は、「想」の自立動詞の意味が強く出て、例 30 は、「予定」「当為」の意味が強く出ているのである。

6 情意的・認識的性質が「シタイ」・「シヨウ」と「要」・「想」への影響

今までの論述から、意志というモダリティのカテゴリにおいて、情意的・認識的性質から見れば、日本語は形式上で情意的なものとして認識的なものを区別し、中国語は形式上では区別しないという事実が確認された。そして、「シタイ」・「シヨウ」・「要」・「想」の四つを見ると、「シタイ」・「シヨウ」がより情意的な表現で、「要」・「想」が情意的な意志も認識的な意志も表せる表現ということが明らかになった。このような情意的・認識的性質の違いは、表現の使用制限や表現形式に影響を与えている。

まず、冒頭の部分で挙げた「シタイ」・「シヨウ」と「要」・「想」との人称制限の相違は、まさに情意的・認識的性質に関連している。「シタイ」・「シヨウ」はより感情表現に近いもので、基本的に話し手の願望や意志に限定されているが、「要」・「想」は話し手の気持ちや意志を表す一方、話し手以外の主体にも用いることができるのはやはり認識的な面の影響である。更に、例 1、2、3、4 を見てわかるように、「シタイ」と「シヨウ」は基本的に一人称主体が明示されない形式で使われるが、「要」・「想」は主体の人称を明示することが必要である。「要」と「想」は、情意的な意志を表すという限定がないので、話し手の意志を表すときでも、一人称主体が表示されなければ、意味不明や別の意味の文になる恐れがあるのである。

次に、冒頭で挙げた二つ目の現象について見てみよう。「シヨウ」・「シタイ」と「スルツモリダ」との相違の部分で既に述べたように、認識的意志表現の「スルツモリダ」は聞き手を対象動作に巻き込むことは絶対無いのに対し、情意的な表現の「シタイ」・「シヨウ」は、聞き手が存在する時、聞き手を対象動作に巻き込むことができるということが明らかになった。しかし、このような聞き手を対象動作に巻き込む傾向の影響で、距離のある聞き手に押し付けがましい印象や、なれなれしい印象を与える恐れがある。例えば、下の例 31 のような発話は、話し手が聞き手を対象動作に巻き込もうとする気がまったくなくても、聞き手がその発話を受けて、「何とかしなければ」という責任を感じ、話し手が

¹⁴ 日本語訳は、中国語ジャーナルによるものである。

らの依頼の発話と捉えてしまう可能性もある。

(31)おなか空いた。何か食べたいなあ。

例 31 のような発話は、聞き手が親しい間柄であるならまったく問題ないが、聞き手が目上や距離のある人である場合は、それによって対象動作を実現させて欲しいという言外の意味を感じさせ、聞き手に負担をかけてしまう恐れがある。では、このような情意的意志のモーダルな意味を表す形式に潜んでいる聞き手に負担をかけるリスクは、コミュニケーションの中ではどのように回避されているのだろうか。日本語では、実際の談話の中で「シタイ」・「シヨウ」が使われる時、そのままの形も見られるが、冒頭で挙げたように文末に何らかの形式が付加される形も多い。例えば、「シタイ」は、文末に「のだ」がつくと、聞き手への感情のぶつかりではなく、話し手の意志についての説明となっている。更に、既に意志を表す複合的な表現形式として定着した「シタイ・シヨウ+ト思ウ」の形式も、「ト思ウ」の付加により、より認識的な表現になり、話し手の感情表出による聞き手への失礼さを避けるためのものである。

一方、中国語にはこのような形式上の工夫が必要とされない。その原因の一つは、「要」と「想」は形式上で情意的な部分と認識的な部分を区別していないからである。情意的性質と認識的性質を区別しないということは、この部分は情意的で、この部分は認識的である、のようにくっきり分かたれるのではなく、ある場面はより情意的な面が強くなる、ある場面はより認識的な面が強くなるということに過ぎない。このような特徴は「要」・「想」の意志のモーダルな意味の多義性につながる。「シタイ」と「シヨウ」は「シタイ」は「願望」、「シヨウ」は「決意」のように意味が一貫している表現であるが、「要」・「想」はそう簡単に行かない。「想」は「シタイ」に近い「願望」も表せるが、「スルツモリダ」に近い「心積もり」も表せる。一方、「要」は更に複雑で、「願望」や「決意」、「予定」まで表すことができる。また、一人称主体の「要」・「想」は、認識のモダリティも表すことができる¹⁵ので、発話の意味解釈が更に多義的になってしまう（例 31 を参照）。情意的な面と認識的な面をはっきり区別しないので、「シタイ」・「シヨウ」のように情意的な表現による失礼さが問題にならないし、表現形式の変更も必要とされないのである。

7 終わりに

日中両言語の意志表現を比較することによって、形式上でより情意的な表現とより認識的な表現を区別する言語と区別しない言語が存在することが確認された。意志表現の情意的・認識的性質についての考察は、意志表現の全貌や各表現の特徴を把握することに有意義である。

更に、情意的・認識的性質は、モダリティ研究全体にも関わっている。今回の発表は、意志のモダリティのカテゴリを中心にしたが、判断などの認識系のモダリティを表す表現

¹⁵ 「要」は一人称主体の場合も「当為」の意味合いになりうる。一方、「想」は一人称主体の場合、「我想～」の形で、推測・判断を表すことができる。「シタイ」「シヨウ」にも認識的なモダリティを表す用法があるが、一人称主体のままではできない。そもそも、情意的用法と認識的用法の関係において、「シタイ」・「シヨウ」と「要」・「想」は違う方向が見せる。「シタイ」「シヨウ」は現代語では、意志の用法が中心で、認識的用法が周辺的なもので、「要」・「想」は情意的用法と認識的用法とはほぼ同等関係にある。

についても同様な視点で考察することができるのではないかと考えられる¹⁶。

例文出典：

日本語資料：『博士の愛した数式』『1Q84 BOOK I』

中国語資料：『読者（合本）』『博士の愛した数式』

《转角遇到爱》（台湾テレビドラマ『ホントの恋の見つかった』）

参考文献

日本語文献

安達太郎 1999 「意志のモダリティと周辺形式」『広島女子大國文』16

池上嘉彦 2003 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標（1）」
『認知言語学論考』No. 3 2003 ひつじ書房

池上嘉彦 2004 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標（2）」
『認知言語学論考』No. 4 2004 ひつじ書房

徐愛虹 2001 「希望表明形式による意志表示-日中両語を対照して-」『日本語教育』109

孫樹喬 2011 想の多義性について 『跨文化交际中的日语教育研究1 異文化コミュニケーションのための日本語教育』 p530-531 高等教育出版社

孫樹喬 2012 意志・願望表現の「要」について——日本語の意志・願望表現との対照
神戸市外国語大学外国語学研究所研究科論集 第15号

土岐留美江 2010 『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房

仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

益岡隆志 1997 「表現の主観性」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版

益岡隆志 2002 「定表現と非定表現と不定表現」『国語論究10 現代日本語の文法研究』
明治書院

益岡隆志 2006 『『タイ』構文における意味の拡張—願望と価値判断—』『日本語文法の新
地平2 文論編』くろしお出版

益岡隆志 2007 『日本語モダリティ探究』くろしお出版

宮崎和人 2006 「まちのぞみ文について—『シタイ』と『シヨウ』—」. 『日本語文法の新
地平2 文論編』くろしお出版

森山卓郎 1990 「意志のモダリティについて」『阪大日本語研究』2

渡邊静夫編 1994 『日本大百科全書 2』第2版 小学館

中国語文献

劉月華等 1983 『实用現代漢語語法』（現代中国語实用文法）外語教学与研究出版社

呂叔湘 1999 『現代漢語八百詞・増訂版』（現代中国語八百語）商務印書館

¹⁶益岡(2007)は、不定真偽判断が大きくは「認識系」と「感情系」に二分できるということを指摘し、事態の真偽に関する認識のあり方を表すものを「認識系」と呼び、話し手の感情が関与しているものを「感情系」と呼ぶようにしている。このような区別は、本論文で扱う情意的・認識的性質と一貫していると考えられる。